

# T. S. Eliotとその祖父William Greenleaf Eliot — 未紹介の説教集 3冊とその周辺 (1)

T. S. Eliot and His Unitarian Grandfather  
— The Life of William Greenleaf Eliot and His Sermons (1)

進 藤 秀 彦  
Hidehiko Shindo

This town interests me & I see kind adventurous people; Mr Eliot, the Unitarian minister, is the Staint of the West, & has a sumptuous church, & crowds to hear his really good sermons.

—Ralf Waldo Emerson in St. Louis, 1852.

I never knew my grandfather: he died a year before my birth. But I was brought up to be very much aware of him; so much so, that as a child

I thought of him as still the head of the family—a ruler for whom *in absentia* my grandmother stood as vecegerent. The standard of conduct was that which my grandfather had set; our moral judgements, our decisions between duty and self-indulgence, were taken as if, like Moses, he had brought down the tables of the Law, any deviation from which would be sinful.

—T. S. Eliot in St. Louis, 1953.

## 目 次

はじめに

1. “Model Grandfather”
2. エマソンの見たセントルイス
3. *Discourses* と *Lectures* (以下次回)
4. 19世紀アメリカとユニテリアニズム
5. アメリカ脱出の夢とその帰結

## はじめに

東京大学総合図書館に、T. S. エリオットの祖父で、ユニテリアンの牧師であったWilliam Greenleaf Eliot(1811-87)の説教集3種類が所蔵されている。

これには、同一内容でタイトルの異なるもの、また出版年の異なる版で寄贈者の違うものが残されていて、合計5冊にのぼる。そのうち4冊は、ボストンの American Unitarian Association およびその関係者から、東京自由神学校(その歴史は不明)に寄贈されたものであることが、表紙裏

に貼られた蔵書票で知られ、日本の「ユニテリアン協会」の解散に際してと思われるのだが、同協会から大正13年8月に東京帝国大学に寄贈されている。残りの1冊は、明治の開化に大きな功績を残し、また日本にはじめてエマソン(Ralf Waldo Emerson, 1803 - 82)を紹介した外山<sup>まさかず</sup>正一の次男、外山高一氏から昭和9年に寄贈されたもので、扉には M. S. Toyama の署名が見える。

この5冊のうち、最初に刊行された1冊だけ、著者の表記が William G. Eliot, Jr., Pastor of the First Congregational Society of St. Louis となっているが、あとの4冊に見られる肩書きは Pastor of the Church of the Messiah, St. Louis となっており、出版元も、ボストンの American Unitarian Association と表記されている。

この5冊のタイトルと出版の年次は、以下のとおりである。

A-1 *Discourses on the Unity of God, and Other Subjects* (Printed for the American Unitarian Association, Boston: Crosby,

Nicols, and Company, ca. 1852), 10th thousand, 1854.

A-2 *Discourses on the Doctorines of Christianity*, (タイトルが異なるが、本文はA-1と全く異同のないもの), 22nd thousand, 1890.

B-1 *Lectures to Young Men* (1853), 9th ed., 1869. (外山高一氏寄贈のもの)

B-2 *Lectures to Young Men* (1853), 12th ed., 1890.

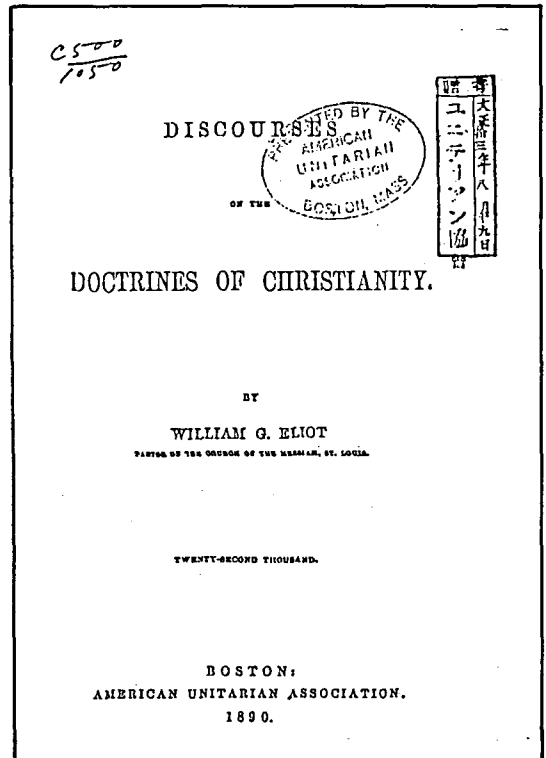
C *Lectures to Young Women* (1853), 11th ed., 1890.

これらは、まちがいなく T. S. エリオットの祖父の著作でありながら、これまでどの伝記的研究にも言及されていない未紹介のものである。

この祖父は、1834年にハーヴァード神学校を終えるとすぐ、人々の教化と伝道の理想を抱いてボストンからセントルイスに移り住み、この地で最初のユニテリアンの教会を作った。はじめは The First Congregational Society と呼ばれ、やがて立派な建物ができて、The Church of the Messiah と呼ばれたこの教会で行われた1850年頃の一連の説教が、上に記した3種類の説教集をなしている。

T. S. エリオットが生まれたのは、この祖父が世を去った翌年のことであったが、セントルイスのエリオット家は、このウィリアム・グリーンリーフ・エリオットの残した教えが色濃く支配する家庭であったことがよく知られている。特に、詩人エリオットの人間形成に強い影響を与えた母親は、結婚して以来、この義父への尊敬の念を終生持ち続け、トム (T. S. エリオットは家族、友人たちからはこう呼ばれた) が16歳のとき、自分の子供たち6人がこの祖父のことを忘れぬように (“Lest They Forget”) との思いを献辞に記して、この義父の伝記を出版している (*William Greenleaf Eliot, Minister, Educator, Philanthropist*, 1904)。

祖父の強い影響のもとにあった家庭に育ったにもかかわらず、また祖父の教えからされることのない両親の教育にもかかわらず、エリオットは、原罪の強調よりも信仰における人間の理性と道徳を重んじて Liberal Christianity と呼ばれたユニテリアンの教義に疑問を抱きながら成長し、



A-2 *Discourses on the Doctorines of Christianity* 扉

ハーヴァード大学に入学する頃までには、この教義には全く関心を失っていたという。また Lyndall Gordon がまとめたエリオットの伝記によれば、彼は6歳のとき、ケンブリッジの Magdalene Chapel で英国国教会の信徒として行った説教のなかで、自分の幼少期の環境について触れ、両親の家庭を支配していた「理知的で清教徒的な合理主義」(“intellectual and puritanical rationalism”) にはずっと満足できない思いを抱いていたと述べている。

しかしながら、エリオットは晩年に至って、自分の感受性や宗教的な意識の源泉は、自分の生まれたアメリカにあると認めるようになり、1955年にハンブルグでドイツ人の聴衆を前にして行った講演のなかでは、自分のことを “a Catholic cast of mind, a Calvinistic heritage, and a Puritan temperament”<sup>5</sup> をひとつにしたような存在であると自己規定したし、その4年後、*Paris Review* に載せられたインタビューでも、自分の詩は同世代の英国詩人たちよりも、アメリカの詩人たちによりつながりの深いものであり、自分の詩の源はアメリカにあると、はっきり述べている。

こうしたエリオットの感受性の背景について、彼の改宗までを扱った、ゴードンによる精緻な伝記は、あるべき姿を求めて苦しみ続けるエリオットの意識や宗教的想像力の根には、彼の青年時代までのアメリカが決定的な影を落しているとして、彼の祖父の姿や、母親の詩に繰り返し現われる宗教的英雄たちの人物像、また毎年夏を過ごしたニューイングランドの海辺の景物にその原型を求めている。

It is hard to say exactly how or when the commanding idea is born but, in Eliot's case, an obvious source suggest itself in the dramatic figures that surrounded his American youth. The shadowy exemplary figure that haunts Eliot's poetry may be traced back to the model grandfather, whom Emerson called 'the Saint of the West', to the New England mother's heroes of truth and virtue, to the hardy fishermen of Cape Ann, Massachusetts, and the rockpool and silences between the waves that shaped Eliot's religious imagination. Towards the end of his life Eliot came to see his poetry as more American than English: '... in its sources, in its emotional springs, it comes from America.'<sup>7</sup>

ここでは、ユニテリアンの牧師でありながら、エリオットに“Calvinistic heritage”を残し、“Puritanical temperament”を伝えたと思われる彼の祖父の姿を追ってみたい。

## 1. “Model Grandfather”

T. S. エリオットの伝記のはじめには、彼の父母とならんで、エリオット家のモーゼとも言うべき彼の祖父のことが必ず語られる。詩人となるトムが生まれる前年に世を去ったユニテリアンの牧師、William Greenleaf Eliot (1811-87) である。T. S. エリオットがチャールズ河の近くにはなくミシシッピ河のほとりで生まれ育ったのは、この祖父の若き日の使命感と決意が生んだ結果とも言

える。

ウィリアム・グリーンリーフ・エリオットは、宗教家の理想主義と、現実的な事業家としての指導力を併せ持つ、ユニテリアンの一典型とも言えるべき人であった。この祖父は、23歳でハーヴァード神学校を終えると、ただちにセントルイスに移り住み、当時まだ辺境の新興都市であったこの地で最初のユニテリアンの教会を組織し、立派な教会堂を建てただけでなく、つぎつぎに三つの学校を設立し、また、はじめ Eliot Seminary と呼ばれた現在のワシントン大学の創立にあたっては、その中心的な役割をはたして、その最晩年には5年間この大学の学長をつとめた。こうした教育関係の事業だけでなく、日頃から禁酒運動や婦人の参政権獲得のために力を注ぎ、洪水、大火、また1840年代のチフスやコレラの流行のたびごとにその救済のための運動を組織して、休むことなく人々のために働いた。また、家庭にあっては夫の理想主義を共有する妻に支えられて、息子4人、娘1人を育てただけでなく、生涯に26人の孤児たちをひきとって育て上げた。そして、50歳のとき、南北戦争が始まると、傷病兵のための救援団体 Western Sanitary Commission を組織して資金を集め、15以上の野戦病院の設立と維持に大きな行政的手腕を発揮するなど、その一生を通じてさまざまな社会事業に多くの足跡を残している。

このように、彼は生来の指導者であり、その一生は、信徒たちや地域の精神的支柱として、またセントルイスのエリオット家の中心として、まことにその師表たるにふさわしいものであったと言うことができよう。*The Encyclopedia Americana* には、この祖父の独立した項目はないが、St. Louis の項を引くと、南北戦争に際してのウィリアム・グリーンリーフ・エリオットの功績が、次のように記されている。

Besides functioning as a military supply base, St. Louis, throughout the Civil War, served as a hospital center and as the headquarters of the Western Sanitary Commission, founded by Dr. William Greenleaf Eliot, prominent minister and educator, to care for the sick and wounded.<sup>1</sup>

T. S. エリオットは、この祖父の次男 Henry Ware Eliot (1843-1919) を父とする 6 人の子供の末子として、セントルイスに生まれた。父親も母親 (Charlotte Champe Eliot, 1843-1929) も既に 45 歳を迎えており、5 番目の子供であった兄 Henry Ware Eliot, Jr. をのぞくと、あとはすべて姉たちで、一番上の姉は、トム・エリオットが生まれたときには既に 18 歳であった。

この姉たちや、9 歳年上の兄は、祖父ウィリアム・エリオット牧師の姿をよく知っていたはずである。ゴードンの伝記は、この祖父の風貌を「きゃしゃな体格」で「大きく、澄んで温和な目」(“a narrow frail body with large, calm, benign eyes”<sup>2)</sup>) を持っていたと書いているが、残されている 2 葉の写真を見ると、まだ 30 代と思われる壮年期の写真<sup>3)</sup>でも、また、既に豊かな白いあごひげをたくわえ細縁の眼鏡をかけた 60 歳頃の写真<sup>4)</sup>でも、エマソンの姿に似た、なで肩で細身の小柄な体と、面長な顔のなかで澄んで見開かれているが、どこか強靱さを秘めている目もとが印象に残る。T. S. エリオットの目がしばしば翳と鋭さを残しているのに比べ、この祖父の目には澄んだ明るさがあり、内面の力を外に向けることができ迷いのなかった人、いかにもその信念と行動との間に影が落ちることのなかった人という印象を受ける。

エリオットは、祖父の顔を直接知ることはなかったが、彼の幼年時代の環境には、この祖父の見えざる姿が遍在していたと言える。祖父が建て、40 年間在職した Locust Street の The Church of the Messiah は、エリオットの生まれ育った家 (2635 Locust Street) の西側 2、3 ブロックのところであり、また、祖父が永く住んだ家 (2660 Washington Avenue) は歩いて数分のところであって、そこにはまだ、祖父の立場を引き継いだような姿で祖母が暮らしていた<sup>5)</sup>。そして、Washington Avenue の一方には、まだ規模の小さかったワシントン大学の校舎として使われていた建物立っていた。

エリオットの生まれ育った家の敷地は、もともと祖父の所有する土地であって、その家の裏庭は、塀をへだてて Mary Institute の校庭と境を接していた。この女子校は、ワシントン大学の設立を成しとげた祖父が、それに続く事業として友人の助

力を得て設立したもので、その校名は、早世したウィリアム・グリーンリーフの娘の名前にちなんだものであった。トムの姉たちは当然、この学校で学んだが、それだけでなく、こうしたつながりから、エリオット家の子供たちは、この女子校の校庭で遊ぶことを許されていた<sup>6)</sup>。この裏庭の塀には小さなドアがあり、それを抜けると広い校庭があって、そこには 1 本のニワウルシ (ailanthus) の木が立っていた。この木のそばに立って、あるいはもたれかかって笑顔を見せる、半ズボンの制服に帽子をかぶった 9 歳頃のトム・エリオットの写真が残っているが、この校庭で遊んだ頃の幸福な思い出は、晩年のエリオットの心に強くとりついて離れなかったらしく、この幸福な少年時代を象徴する小さなドアやニワウルシの木、そして塀のむこうから聞こえてくる子供たちの笑い声のイメージは、*Four Quartets* や *Family Reunion* などに繰り返し現われている<sup>7)</sup>。

家庭や遊び場だけでなく、学校にも見えざる祖父の姿があった。彼は、父や兄が学んだワシントン大学には行かなかったが、彼の幅広い教養の下地となる教育を与えたのは、ワシントン大学に付属する学校としてこれも祖父が創立した Smith Academy であった。彼は 10 歳から 16 歳までの 7 年間をここで学んだが、卒業に際しては、卒業生代表として、いかにも模範生といった趣きの、14 連からなる自作の定形詩を読み上げている。16 歳の彼は、既に祖父の説いた教義には強い疑問を持っていたはずであるが、彼に与えられた公的な役割のためか、その第 13 連では、人間の教化と社会の進歩を信じた祖父の孫にふさわしい言葉を記している。その原文と拙訳を掲げる。

As thou to thy departing sons hast been  
To those that follow may'st thou be no less;  
A guide to warn them, and a friend to bless  
Before they leave thy care for lands unseen:  
And let thy motto be, proud and serene,  
Still as the years pass by, the word "Progress!"<sup>8)</sup>

汝のもとを去りゆく我らに汝が与えし如く  
あとに続く者たちにも、汝、わが母校よ、  
変わらず与え続けんことを。  
汝の子らが、見知らぬ国へと汝の手を離れ行くまで

正しく導く者として、また彼らを祝福する  
友としてあれ。  
そして年月が過ぎ行こうとも、誇り高く静かに  
「進歩」の言葉を目標に掲げ続けよ。

彼の母校は、卒業生代表の“Progress!”の願いにもかかわらず、数年後に閉鎖された。しかし、この詩を積み上げたのが、聴衆を前にして演壇に立った最初の体験だったと、この48年後、ワシントン大学の創立百年行事に招かれて記念講演を行った64歳のエリオットが語っている。

この講演は“American Literature and American Language”と題されたものであったが、この講演の冒頭で彼は、自分が生まれ育ったセントルイスと自分との関係や少年時代の思い出に触れずにこの講演を行うことはどうしてもできないと述べ、講演の前置きとして Smith Academy で受けた古典語中心の教育や、この大学の創立者のひとりであった祖父について、次のように語っている。

The early history of this University which my grandfather served with tireless devotion until his death, is inextricably involved for me in family and personal history. I never knew my grandfather: he died a year before my birth. But I was brought up to be very much aware of him; so much so, that as a child I thought of him as still the head of the family—a ruler for whom *in absentia* my grandmother stood as vicegerent. The standard of conduct was that which my grandfather had set; our moral judgements, our decisions between duty and self-indulgence, were taken as if, like Moses, he had brought down the tables of the Law, any deviation from which would be sinful.<sup>9</sup>

続いて、この祖父の残した教えの中で、とりわけ重要な義務となっていたのが、社会への奉仕 (the law of Public Service) ということであったとして、ユニテリアンの教会、セントルイスの町、そして大学について、こう述べている。

This original Law of Public Service operated especially in three areas: the Church, the

City, and the University. The Church meant, for us, the Unitarian Church of the Messiah, then situated in Locust Street, a few blocks west of my father's house and my grandmother's house; the City was St. Louis—the utmost outskirts of which touched on Forest Park, terminus of the Olive Street streetcars, and to me, as a child, the beginning of the Wild West; the University was Washington University, then housed in a modest building in lower Washington Avenue. These were the symbols of Religion, the Community and Education.<sup>10</sup>

これが、その半世紀前の彼をとり囲んでいたセントルイスの町であった。ボストンの町を、そしてパリとロンドンを知る前のエリオットは、毎年9カ年はミシシッピー河のほとりに住み、夏の3カ月はマサチューセッツの海岸の家で過ごす幸福な少年時代を送った。

彼はこの講演の前置きを、セントルイスに生まれたことへの感謝の言葉で締めくくっている。

I am very well satisfied with having been born in St. Louis: in fact I think I was fortunate to have been born here, rather than in Boston, or New York, or London.<sup>11</sup>

しかしこれは、64歳のノーベル賞を受けた詩人の公的な発言と言うべきで、彼はこの25年前には、自分の親たちが、ニューイングランドとのつながりが切れてしまうのを恐れ、何とかそれを失うまいと努めていたと語っている。そしてまた、祖父や親たちがもつ二つの故郷の間で成長するにつれ、セントルイスにおいてはニューイングランド人であり、ニューイングランドに行けば南西部の人間であるという奇妙な感じを覚えるようになったという。

The family guarded jealously its connections with New England; but it was not until years of maturity that I perceived that I myself had always been a New Englander in the South West, and a South Westerner in New England . . . In New England I missed the long dark river, the ailanthus trees, the flaming cardinal birds, the high limestone bluffs

where we searched for fossil shell-fish; in Missouri I missed the fir trees, the bay and goldenrod, the song-sparrows, the red granite and the blue sea of Massachusetts.<sup>12</sup>

彼は、ボストンやニューヨークやロンドンに生まれなかったがゆえに、これらの都市に育った人間が自然に持つことのできる、その都市の属する文明への安定した帰属感を希薄にしか持つことができなかつた。しかしまた、それゆえに彼はより鋭敏に、文明というものの伝統を意識するようになったと思われるのである。

エリオットが、ヨーロッパの文明とか伝統を意識するようになるのは、ボストンやパリに学んだのちのことであつたが、少年時代の彼にとって、いつでも思い出せたのは、マサチューセッツ州グロスターの Cape Ann にあつた海辺の家であり、また暗い大きな河があり、裏の校庭にはニワウルシの大きな木が立っていて、燃えるような深紅の羽根をもつ鳥が飛ぶセントルイスであつた。

## 2. エマソンの見たセントルイス

エマソンは生涯に少なくとも2度、エリオット牧師の説教に接しており、その2度とも、同門に学んだ自分より8歳年下のユニテリアンの牧師の説くところに、高い評価を与えている。

1852年の暮れ、連続講演のため2週間の予定でセントルイスにやって来たエマソンは、妻にあてたこの町からの第2便で、その様子を次のように書いている。おわりに出てくる Edith とは、彼らの娘の名である。

St. Louis

31 December 1852

Dear Lidian,

... This town interests me & I see kind adventurous people; Mr Eliot, the Unitarian minister, is the Saint of the West, & has a sumptuous church, & crowds to hear his really good sermons. But I believe no thinking or even reading man is here in the 95000 souls.

An abstractionist cannot live near the Mississippi River & the Iron Mountain. They have begun the Pacific Rail Road; & the Railroad from St Anthony's Fall to New Orleans. Such projects cannot consist with much literature, so we must excuse them if they cannot spell quite as well as Edith.<sup>1</sup>

この「西部の聖者」(“the Saint of the West”)という言葉は、当地でのエリオット牧師の評判であつたのであろうか、それともエマソンの受けた印象を言葉にしたものであろうか。いずれにせよ、教会の制約の中での牧師職にあき足らず、ユニテリアンの教会を去っただけでなく、ハーヴァード神学校での有名な講演、いわゆる“The Divinity School Address”(1838)で、教会の形式にとらわれることなく、心の正しさと直観のみによって神を知ることを説き、穏健なユニテリアンたちからさえ非難されたエマソンのことである。まわりの評判からだけで、説教壇に立つ人間を Saint と呼ぶような人物ではなかつた。

聖者の印象は、エリオット牧師の不自由な右手にも宿っていたかもしれない。この年の3年前、セントルイスにコレラが流行したが、このときエリオット牧師は何週間もの間、休まず病人や死を待つ人々を訪れ、毎晩3時間ほどしか睡眠をとらないという生活を続けたため、極度の過労から右手の麻痺が始まり、以後その右手は回復することがなかつたという?

エマソンを迎えた41歳のエリオット牧師は、この地での18年を経て、彼の人生の最も活動的な時期を送っていた。彼は既に、エマソンが「とてもお金のかかった立派な建物」(“a sumptuous church”)と呼んだ The Church of Messiah を建て、その教会の献堂式に続いて行った説教は *Discourses on the Unity of God* としてまとめられ、American Unitarian Association の図書としてボストンで出版されたばかりであつた。しかし、エマソンの手紙に人口9万5000人と記されているこの町には、鉄道建設の波に乗ってつぎつぎに人間や資本が流入し、西部への交通の中心地として急速に膨張を続けていたにもかかわらず、いまだ大学と呼べるものはなく、エリオット牧師は、東部からやってきた指導者として、この町にも“reading man”や

“thinking man”を生み出すべく、教会での活動のほか、ワシントン大学の設立に向かって準備を進める毎日であった。

エマソンの手紙の後半からもうかがえるように、このころのセントルイスは、西と南への鉄道建設の拠点として、年ごとに変貌を続けていた。セントルイスへの到着を告げる彼の妻への第1便でも、ケンタッキー州ルイヴィルからの汽船による長旅のことを伝えて、川が氷に閉ざされて先へ進めないことがあると聞かされて不安であったが、そのようなこともなく無事到着できたのは幸運だった。しかしシンシナティからの鉄道が開通すれば、距離は船旅の半分以下になるから、船で旅する人間はいなくなってしまうだろうと述べて、時代の変化を予見している。

セントルイスは、もともと18世紀にフランスの毛皮商人たちの貿易中継地として開かれ、やがてケンタッキーやヴァージニアから開拓民たちが入植して町の形をなしていったが、1820年頃の人口といえはまだ6000人以下であった。そのうち、ドイツやアイルランドからの移民が数多く流入して町は急激に大きくなり、ミシシッピ河をめぐる水上交通や輸送の中心地として栄え、1851年に太平洋鉄道(The Pacific Railroad Company)がセントルイスを起点に西へと鉄道を敷き始めると、この町は、鉄道建設とともに空前の発展を続けて、急速に都市化した。この経済的発展は、世紀末に大陸中部の交通の中心地としての役割をシカゴに奪われるまで続いたが、エマソンはこの発展の活力を肌で感じとり、妻に続いて兄にあてた手紙では、この町の驚異的な成長にふれて、もし体力と気力に恵まれた若者を必ず成功させたいなら、この町に送ることだと、次のように書いている。

This city is a wonderful growth, & if you would send out a young man of energy to the very best assurance of success, send him here.<sup>3</sup>

しかし、この町の成長を底辺で支えたのは、経済的安定を求めて、あるいはその日の糧を求めてこの都市にやってきたヨーロッパからの移民たちであり、周辺の辺境からの移住者たちであって、その多くは、エマソンが、自分の娘のイーディス

ほどにも字の書けないと言ったような人々であった。(1850年のセントルイスの住民の3分の1はドイツで生まれた人々であり、1860年には、この町の人口18万6000人のうち、アメリカ国内で生まれた人々は、その半数以下であった。)<sup>4</sup>

エリオット牧師が40年間、たゆまず教化を続けなければならなかったのは、こうしたマモンの力によってこの都市に吸い寄せられてくる若者たちや移民たちであり、こうした人々を迎えて膨らんでゆくこの町にあって、彼の説教を聞きにメサイア教会に集まってくる人々であった。

それでは、エマソンが“his really good sermons”と呼び、その20年後にも再び“an excellent sermon”<sup>4</sup>と呼んだウィリアム・グリーンリーフ・エリオットの説教は、いったい、いかなるものだったのだろうか。

## Notes

### はじめに

1. 秋山錦子きぬ氏のご教示による。大正時代のユニテリアン協会会員で、現在、帰一教会(The Tokyo Unitarian Church)主幹である今岡信一しんいちろう良師(明治14年生まれ、前正則学院高校理事長)の教会で行われる日曜講話の英語への通訳を長くつとめられた秋山女史によれば、明治23年(1890)にArthur May KnappやClay MacCauleyらのアメリカ人を迎えて設立された日本ユニテリアン協会は、大正13年(1924)頃のマコーレー牧師の帰国により、解散に至ったという。
2. Charlotte Champe Eliot, *William Greenleaf Eliot, Minister, Educator, Philanthropist* (N. Y.: Houghton Mifflin, 1904). T. S. MatthewsやLyndall Gordonなど、これまでのエリオットの伝記・評伝にみられるWilliam G. Eliotについての記述は、いずれもこのC. C. Eliotの手になる本をもとに書かれている。
3. Lyndall Gordon, *Eliot's Early Years* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1977), p. 11.
4. Ibid., p. 12.
5. T. S. Eliot, “Goethe as the Sage,” *On Poetry and Poets* (London: Faber, 1957), p. 266.

6. Kay Dick, ed., *Writers at Work: The Paris Review Interviews* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1972), pp. 131-32.

7. Gordon, p. 2.

#### 1. "Model Grandfather"

1. *The Encyclopedia Americana* (N. Y.: Americana Corporation, 1970), Vol. 24, p. 150.

2. Gordon, p. 8.

3. Gordon, facing p. 16.

4. Peter Ackroyd, *T. S. Eliot: A Life* (N. Y.: Simon and Schuster, 1984), facing p. 128.

5. John J. Soldo, *The Tempering of T. S. Eliot* (Revision of Ph. D. thesis, Harvard Univ., 1972), (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1983), p. 7.

6. Soldo, p. 5.

7. たとえば、裏庭の小さなドアの思い出は、*The Family Reunion* (1939) のなかの Agatha のせりふとして、次のように語られる。

Harry must often have remembered  
Wishwood—

The nursery tea, the school holiday,  
The daring feats on the old pony,  
And thought to creep back through the little  
door.

(*The Family Reunion*, Faber, 1939, p. 17)

また、“The Dry Salvages” (1941) のはじめには、  
ミシシッピ河のほとりの四季の移りかわりを感じさせる象徴のひとつとして、臭いにおいを放つニワウルシの木が語られている。

His rhythm was present in the nursery bedroom,  
In the rank ailanthus of April dooryard,  
In the smell of grapes on the autumn table,  
And the evening circle in the winter gaslight.

*Four Quartets* 全体に繰り返し現われる子供たちの笑い声については、特に指摘するまでもないであろう。

8. T. S. Eliot, “[At Graduation 1905],” *Poems Written in Early Youth* (N. Y.: Farrar, Straus and Giroux, 1967), p. 17.

9. T. S. Eliot, *To Criticize the Critic* (London: Faber, 1965), p. 44.

10. Loc. cit.

11. Ibid. p. 45.

12. T. S. Eliot’s Preface to Edgar A. Mower, *This American World* (London: Faber, 1928). 引用部分は、エリオットの講演がワシントン大学から小冊子 (*American Literature and the American Language*, 1953) として出版された際に、同大学英文学科が Appendix として付した “The Eliot Family and St. Louis” と題する文章のなかに引用されている (同冊子, p. 28)。

#### 2. エマソンの見たセントルイス

1. Ralph L. Rusk, ed., *The Letters of Ralph Waldo Emerson* (N. Y.: Columbia Univ. Press, 1939), Vol. IV, pp. 338-39.

2. Stephen Spender, *Eliot* (London: Fontana, 1975), pp. 23-24.

3. Rusk, ed., Vol. IV, p. 340.

4. Rusk, ed., Vol. VI, p. 217.